

文教協会50年を振り返る②

教育実践研究論文の原点



文教協会事務局

大垣市文教協会の前身として、大垣市教育研究会があります。当時の大垣市教育研究会の活動の様子を、「大垣市教育研究会報」（文教協会報の前身）から知ることができます。その会報の第1号は1962年（昭和37年）10月20日に発行されています。実は、1963年（昭和37年）3月26日付第7号に、すぐれた研究に助成金を交付した記録が残っています。

たとえば、ある小学校教諭は「新しい文学理念による創作の展開」というテーマで、ある中学校の社会科学研究部は、「『郷土学習』西濃の中心—大垣」というテーマで長年に渡って研究を行ったようです。このようなすぐれた研究実績を残した個人や団体を対象に、研究助成金を交付してその業績を讃えています。

その精神は、文教協会が発足した1965年以降も引き継がれ、当初から研究助成費として5万円の予算が組まれています。（発足当初 会員は575名）

文教協会が発足する前から、大垣市の教育振興のためにすぐれた研究を積み重ねてきた諸先輩方の足跡をたどってみたいと思います。今回は、原点といえる「大垣市教育研究会報」の第1号（昭和37年10月20日号）を紹介します。

大垣市教育研究会報 1962年10.20 第1号 創刊に当って
大垣市教育長 山田光之介

お互いの生活、文化、といったものは、先人のつくった基礎の上に、個々のあるいは大衆の知識技能を積み重ねて築いたものであり、また築いているものである、といってもよいと思う。

教育の世界もその例外ではないのであって、その進歩のためには常にお互いの総力が結集されなければならない。卓見でも卑見でも、成功した事例もはずかしい失敗例も、裸のままできさかのためらいもなく提供され、それがお互いの力でさらに検討され修正され錬磨されるならば、個々人の教育力が素晴らしく伸びるばかりでなく、本市の教育も一段の飛躍をするに違いあるまい。

本誌は、こういった目標のもとに諸君に提供される場である。ご活用とご協力を願ってやまない。

教材研究
長野県の自然条件と人のくらしの関係について
興文小社会科学研究部

4年単元土地とくらしの展開において、長野盆地の自然条件の特色を、どのようにしてつかませていったらよいかという視点から、取り上げられた問題点の概要にふれてみたい。

- 地図を読み取る学習において、子どもが見つけたことをもとにする話し合いを深めていく場合、黒板または白地図にそれが略図化され、構成されていくようにすることがもともと基本的な学習の進め方ではないか。
- 地形その他の諸条件がこうだから、そのために風向、気温、雨量が云々とおさえしていくのは、かなり高度な基礎的知識と周到な検討を必要とするのであって、小学校程度の子どもにきびしく迫って一つの断定を引き出させることには、危険がないとはいえない。なお、気温の低いこと、雨量風向などについては、その事自体が相対的なものだからその生活舞台における具体的な生活事例を取り上げていくようにすれば、当然郷土大垣における吾々の生活のようすのちがいが具体的に意識されていくであろう。
- 教科書土地利用図P70を取り上げて考えるとき、川ぞいに桑畑、りんご畑の分布図を見るだけでよいであろうか。実際には川沿いに広大な美田が広がっている事実を見逃してはならない。長野県は米の生産においては自給県であり、移出県でもあるが、棚田は米作りに挑む農民の姿勢をうかがうものとして取り上げられなければならない。なお、りんご作りそのものも農民が克服して今日を築きあげたものであれば、更に社会的な条件の追求の中に進取的な農民の姿勢にふれていくようにしなければならない。

— 略 —

吾々がよく解明し得なかった盲点につき、山田教育長から直接的に示唆にとんだ教材事例と共に教材研究の本質的な考え方のご指導をうけ、学習の対象を明らかにしていくことの大切なことを今更のように考えさせられた。

第1号の目次から、教材研究等に関わるコーナー紹介

・ニュープリンスの巻末	片山 元平
・算数指導上の質問6カ条	日新小学校
・パレットの使い方	水野 正信
・図書館経営のポイント	佐々木 武
・運動クラブにおける問題点	川合 実
・理科算数の問題点の究明	宇留生小学校
・考える子を育てる理科学習	南小学校 など

研究会報を毎月発刊することになった目的は、日常の実践から得られた問題点や研究の結果を交流し合って、生きた活動資料にしたいという先生方の願いからです。先輩方の「深い教材研究に基づいた教育」への熱い思いが今日の教育実践研究論文へ脈々と受けつがれています。